

海事特報

購読料1ヵ年 63,800円(送料・税込)
昭和41年8月18日 第三種郵便物認可

海運・造船

(禁無断転載)

令和7年12月15日(月) 1705号

みんなの力で育てよう海運・造船を

記者の目

自動運航船商用運航と修繕5社連合の発足

無人運航船の実現を目指す「MEGURI 2040」プロジェクトで離島航路旅客船「おりんぴあどりーむせと」が12月5日に国内初となる「自動運航船」として国の船舶検査に合格した。一般旅客が乗船する定期船としては世界で初めて、自動運航機能(自動運転レベル4相当)を活用し、岡山(新岡山港)／小豆島(土庄港)間で12月11日以降、商用運航を開始する。

思い返せば、記者は2022年1月11日に、横須賀市の新三笠桟橋から猿島間(約1.7km)で実施された小型観光船「シーフレンドゼロ」の無人運航実証に乗船し、世界初の自動運航操船を体験した。当時は離着舷動作も正直お世辞にも上手いとは言えず、今回の旅客船での商業運航達成という快挙に「よくぞここまで到達した」と感慨深さを覚える。

また、本特集で取り上げている修繕業の協業・連携も、スタートからわずか2年半で「関東地区+尾道の5社連合」へと急拡大した。修繕業にもシェアリングエコノミーの思想が着実に定着し、これから本格的に人・モノ・スキルのシェアが始まる。無駄を排し、高度に効率化された新時代にふさわしい造修ヤードの歴史が、まさにここから幕を開けようとしている。

内航海運では未来の海上輸送スタイルが動き出したが、一方の船を修繕するヤードの空きポジションが無いという不満の声が船主から出ている。そうした中で、ユーザーのニーズに即応し、協業・連携先をフル活用することで、急な修理にも対応できる新体制を整えようと動いている。これこそが海事立国ニッポンの強みである。海運・造船・船用関連のすべてが、今、未来志向へと大きく動き出している。

- ◆NSY、スプレー式防熱システムを開発…………… 5
新燃料Bタンク向け、ハングクと共同で
NK、LR船級から基本設計承認を取得
- ◆LCO2タンクで新鋼材と新技術を開発…………… 6
三菱造船と日本製鉄、世界初GDA取得
- ◆古野電気、避航操船支援システムを搭載…………… 7
日本郵船のマリンDX船に、来年3月竣工
- ◆韓国塗料メーカーと資本業務提携を締結…………… 8
中国塗料、製品開発や市場開拓を強化へ
- ◆OECD造船委、金融ルール改定を協議…………… 9
日本、韓国造船支援策の透明化を求める
- ◆日船工、3大学で船用工業説明会を開催…………… 10
芝浦工業大学、鹿児島大学、長崎大学で
- ◆内航業界初、VRナビシステムを初搭載…………… 11
近海郵船「ましう」、NKからIE符号
- ◆沖縄船用工、水産高校で計測技術講習会…………… 12
整備協と連携し計測スキル習得を後押し
- ◆世界初、旅客船が自動運航で商用運航開始…………… 14
国際両備フェリー、岡山／小豆島の間に
- ◆輪組、11月の輸出船契約は18隻61万総ト…………… 15
29～30年度向け先物受注が約半数占める

業界レポ

修繕業の協業連携で「5社連合」が発足…………… 17
人、物、スキルをシェアして効率経営へ
住友ME・横浜工作・向島・京浜・東亜

◆各社動向…24 ◆一筆啓上1064…31 ◆巷 雀…32



近海郵船の内航船「ましう」

瞰表示する。鳥瞰する高さや角度は自由に変更でき、自船周辺の状況を多角的に把握できるため、衝突回避の判断や航路計画、さらには陸上からの監視支援にも有効となる。

今回の搭載により、「ましう」には日本海事協会（NK）から、先進的な安全対策を講じた船舶に付与されるイノベーションエンドースメントとして二つの船級符号が付記された。ひとつは、AISで取得した他船情報から将来衝突する可能性のある危険領域や航行が妨げられる領域を予測・表示して警告する「衝突リスクシステム」を備える船舶に付与される「aSAFE (CRI)」（Advanced Safety <Collision Risk Indication System>）¹⁾ の取得は内航船では初めて。もうひとつは、AIS、レーダー、ECDISなどから得られる周囲の船舶や障害物、地理情報を、船橋カメラのリアルタイム映像または3D仮想映像に重畳表示するシステムを備える船舶に与えられる「aSAFE (XRD)」（Advanced Safety <Extended Reality Display System>）²⁾ が付与された。

✧ 沖縄船舶用工、水産高校で計測技術講習会

整備協と連携し計測スキル習得を後押し

日本船用機関整備協会は十二月九日、沖縄船舶用工業会が沖縄県立沖縄水産高等学校と共催し、海洋技術科機関コースの二・三年生を対象に「計測技術講習会」を実施したと発表した。地方船用工業会が水産高校と連携して計測技術の講習会を開くのは今回が初めて。講習では、船用エンジンのピストンなど実際の機関部品を用いて、ノギスやマイクロメータ、シリンドゲージといった計測器を実際に操作しながら、整備の基礎となる計測技



12月5日の計測実習の様子

術を体験した。

深刻化する人材確保の課題に対応するため、日本船用機関整備協会も協賛し、教材となる機関部品や計測器を提供。整備業務の認知度向上と将来の技術者育成を目的に、今回の初の取り組みを後押しした。参加した生徒からは「初めて使う器具もあったが勉強になった」「マイクローメータやシリンドゲージの使い方が覚えられてよかった」といった声が多く、実践的な内容に高い満足度が示された。また、「将来、船に乗って整備作業を行う際に役立つ」「海技士試験にもつながる知識が得られた」といった、将来の職務との関連性を感じる意見も多く寄せられ、講習の意義が明確に伝わった点として注目される。

講習後のアンケート（二年生十七名、十点満点評価）では、受講前の平均一・四七点に対して受講後は平均六・六九点と、計測器に対する理解度が五・二ポイントも劇的に向上したことが確認された。特に理解が低かったシリンドゲージでは、受講後も他の計測器に比べて難しさが残ると感じられ、「もう少し学びたい」といった要望や「シリンドゲージがわからなかった」という率直な感想も寄せられた。一方で、目盛りの読み方や100mm単位での計測など、高精度作業の基礎を習得できたとの回答も多く、短時間ながら技術的成長が見られる内容となった。今回の取り組みは、実務に直結する計測技術を高校段階で体験させることで、造船・船用機関整備分野への理解と関心を高める貴重な機会になったといえる。業界全体で若年技術者の育成が課題となる中、こうした教育連携の試みは今後ますます重要性が増していくと考えられる。

▽主催 沖縄県立水産高等学校、沖縄船用工業会

▽協賛 日本船用機関整備協会

▽開催日 9月25日(木)3年生14名、12月5日(金)2年

生 17 名

▽開催場所 沖縄水産高等学校教室

▽講師 中尾辰夫(沖縄船用工業会、日本船用機関整備協会沖縄支部 事務局長)

✧世界初、旅客船が自動運航で商用運航開始

国際両備フェリー、岡山／小豆島の間を

無人運航船の実現を目指す「MEGURI二〇四〇」プロジェクトに参加する離島航路旅客船「おりんぴあどりーむせと」が十二月五日、国内で初めて「自動運航船」として国の船舶検査に合格した。一般旅客が乗船する定期航路船としては世界初となる。自動運航機能(自動運転レベル4相当)を活用して、十二月十一日から岡山(新岡山港)／小豆島(土庄港)間で商用運航を開始する。

国際両備フェリーが運航する「おりんぴあどりーむせと」は全長六六メートル、

旅客定員五〇〇名。国内には四〇

〇以上の有人離島が存在し、船員不足などにより生活航路の維持が課題となる中、今回の商用運航開始は、船舶の自動化を加速させ、離島における安定的な人流・物流の確保に寄与することが期待されている。両備ホールディングスの小嶋光信代表取締役CEOは「離島フェリーが商用運航可能な自動運航船として認められた意義は非常に大きく、海運の新時代を示す大きな一歩。この技術は安全性の向上、海難事故の削減、そして船



レベル4相当の自動運航で商用運航を開始した「おりんぴあどりーむせと」